

令和元年度全国高校総体 「審判員報告書」

C4 新体操女子

審判長 鈴木あおい・副審判長 寺田江身子

1. 採点上打ち合わせた事項

今年1月以降に出されたHP掲載ルール事項を中心に確認を行い、映像を使った研修時間を多くとり映像研修を行った。映像を見ながら瞬時に判断すること、正しい決定点を出していくことを映像研修のなかで感覚をつかんでいただくようにした。

【個人D1】

- ・手具操作の確認（同じ要素の繰り返しになっているかいないか）
- ・ステップ中の基礎要素の有無
- ・難度の数
- ・ステップ中に0.3の減点が入るものは、ノーカウント
- ・難度の正確さ
 - ・ジャンプ 開脚度
 - ・ローテーション 最低360度の回転と回転数（回転の終わりに大きく1歩移動があっても、軸があって360度の回転があればカウント）
 - ・バランス 1秒の静止（フェットバランス中に入るホップはカウント）

【個人D3】

AD投げの高さの確認。小さな投げ受けは投げと受けで1つのADとしてカウントする。
R投げの高さは中くらい以上でなくてはならない。

【個人ボールE1】

映像での研修は、選手自身の動き・フローの使用・高さの変化・音楽、これらの臨場感に欠け、芸術パートでは、見え方を統一することは難しい部分もあるが、ルールブックを再度見直し、芸術の減点項目それぞれに、どのラインで減点がおきるのかを、審判間で話し合った。

- ・音楽(音)を使った身体の動きと手具操作であるかどうか
 - ・想像力発想力のある動きであるか
 - ・構成上の減点項目である、波動や手具の基礎技術要素等の確認
- 選手の技術レベルや実施力だけに左右されないこと、演技内容とそのつなぎ、身体表現や多様性といった芸術審判が評価すべき部分を意識し、全体像が評価できるように打ち合わせた。

【個人クラブE1】

- ・アイデアのガイドを採点の柱とし、作品の差として点数化していく。
- ・音楽にダイナミズムがない、音楽に変化があるようなものでも動きに変化がない、羅列になってしまっている作品には、ダイナミズムの減点でしっかり差がつけられるようにすること。
- ・実施ミスがあったときにどこまで作品に影響があったかをしっかり判断する。

【個人ボールE3】

- ・手具の受けの際の移動か、演技のつなぎとしての移動かの見極め
- ・BDの誤差の見極め
- ・3本柱（美しさ・構成内容・実施力）の確認

【個人クラブE 3】

- ・事前研修では4名の点差が大きく離れることがなかったが、BDの誤差の減点に多少ずれがあったため、目線を統一した。
- ・姿勢欠点を大きく減点しすぎないように注意しつつも、選手の美しさ、動きの大きさも得点に反映するようにする。

【団体D 1】

交換の追加の基準は投げは投げ、受けは受けで価値の低い方でカウントするので、フープクラブでそれぞれ正しく見極めること、5名の実施を正しく判断できるよう研修で見解を統一した。

【団体D 3】

- ・CR、CRR、CRRR、Rでの回転要素の重複がないか、回転要素が360度行われているかの確認と見極め。
- ・CR、CRR、CRRR、Rで投げでの投げの大きさの確認。
- ・CR、CRR、CRRRの投げと回転要素のタイミングの見極め。
- ・手以外、視野外の投げ受けの基準の確認と見極め。
- ・CCがルールに則って行われているのか。
- ・実施ミスを見逃さずに、正確に行われたものをカウントしていけるよう、全体を把握しながらの採点を研修から心掛けた。

【団体E 1】

- ・個人と同様、アイデアのガイドを採点の柱とし、作品の差として点数化していく。
- ・そのつどの減点はリズムのみなので減点すべき時にはしかりと減点し、構成の差、実施度の差を少しでもつけていく。
- ・身体の実現については、全ての選手が不十分であった場合に減点を与えていく。

【団体E 3】

映像研修では、ミスか構成上かの判断がしにくいため、例えば、落下の見逃しがあったり、移動かそうでないのかの判断でミスととらえたために、減点し過ぎることが多かった。選手の身体と手具の技術の差について、評価できるように確認した。

2. 採点上起こった事項とその処理

選手、チームの、身体レベルと質の見極め・作品構成・完成度・実施度を正確に点数化し、選手、監督、そして観客が納得できる採点を目指した。

【個人D 1】

- ・ローテーション中の手具操作（吊り下げ）が同じ場所で2度使用している選手が見られた。
- ・バランスの静止がない選手はノーカウントにした。
- ・ボールの膝下のつきが2回しかない難度はノーカウント。
- ・鹿ジャンプ系の前脚のたたみ方が弱い選手がいた。誤差0.3のものはカウントした。
- ・ジャンプのシーソーは、開脚度があり軽いシーソーはカウントした。
- ・ボールの操作で、手の周りを回す操作が不確実なものがいくつかあり、ノーカウントにした。

【個人D 3】

ADでは2本のクラブの小さな投げにおいて360度の回転がなくノーカウントにするものが度々見受けられた。また受けのADでは回転や視野外との関わりが不十分なものも多か

った。ボールでは転がして身体を2部位転がっていないものはノーカウントにした。またボールのつきのADはつきが小さく不明確な実施が多かった。ADは0.3の技術減点があるとカウントできない為、身体に接触して受けたものはノーカウントにした。ボールクラブも全体的には同じADを入れている選手が多かったが、同じADを実施していても、実施度が良くないものと、ベースと基準の関わりまで訓練されているものでは最終的な得点に差がついたので、選手がルールを理解し、より精度の高い細かな練習が必要であると感じた。

Rでは回転開脚ジャンプからの投げや、前方投げにおいて投げの高さが不十分でノーカウントになったもの、2回転に360度の回転がないもの、回転と回転の間に間が長くあったものはノーカウントにした。シェネやお尻まわりの重複も見受けられたので、異なる回転にはっきり見える工夫も必要であると感じた。

【個人ボールE1】

現行のルールとなつてから、年を増すごとにさらにADやRの要素が増えたこともあり、表現のための振付は少なくなっている傾向にある。今大会に限らず、作品としてのテーマを感じられる演技は少ない。BDも含め、身体や手具の技を使った表現、つなぎの振付などの部分的な減点と、動きの躍動感・エネルギー感といった全体的な減点、どちらかに偏らないように気を付けた。

片手受け等の基礎技術が見えず、減点を入れた演技数は想像を超えていた。難度の数だけでなく、芸術においても演技の確認は必要と思われる。

音楽の終了時の不一致については、はっきり見えたときには、減点とした。

【個人クラブE1】

- ・基礎技術の減点があった。非対称の不足が多いが、それ以外の基礎の不足も見られた。
- ・身体波動については、2つぎりぎりしかカウントできない作品と、数えなくても多数演技にうまく組み込まれている作品と構成の差があった。
- ・実施ミスがあっても多くの選手は演技への戻りが早く、そのつどの減点を最小限にしようとする高校生のルールの理解度を感じた。
- ・ADやBDを同じ場所でいくつも行き、フロアーをうまく使用できていない場合、多様性の減点を入れた。

【個人ボールE3】

- ・手具の受けの際の移動か、演技のつなぎとしての移動かを審判研修にて確認はしたが、実際の演技では判断に迷いが生じ、審判間に誤差が生まれ、協議し確認をした
- ・身体の減点が的確に入れることができず、審判間に誤差が生まれてしまった。

【個人クラブE3】

全体を通して、落下ミスだけでなく姿勢の悪さ、四肢の緩み、手具の近さ、そしてバランスの静止不足の減点が特に多かった。

また、構成上かミスによる無駄脚なのか曖昧な実施が多く、手具の取り戻しにおいては、その場の2歩か3歩かでの見極めで、点の差がついたように思われる。

【団体D1】

交換の追加基準ではクラブの視野外投げや水平面が不十分、座も受けながら座るなどカウントできない実施が多かった。また基準としてパッセバランスを実施しているがカウントはしても静止の甘さが目立った。5点を超えるD1の得点を獲得するチームは5名が構成にはいつている交換の基準を正確に実施していた。また、フープの投げには価値があるが、クラブには価値がなく最終的な交換の価値点が低くなるなど工夫すれば得点が上がると思われる実施もあった。身体難度に関しては以前よりカウントできる幅が広がったが、それでも1名が0.5の誤差の減点により回転開脚ジャンプや、パンシェターンをノーカウントと判断した実施も見受けられた。

【団体D 3】

- ・複数投げの時の投げの大きさは、中くらいか大きいものとなっているが、手以外、視野外を行うことで1つの手具が小さいものになっている場合があった。
- ・回転の種類では、ことなるものを行っているつもりであっても同じものに見えてしまい、後の方に実施したものをノーカウントにする場合があった。
- ・手以外、視野外の投げ受けの基準を実施していることが多かったが、正確に行っているかを見極め、カウント、ノーカウントを判断した。
- ・CR、CRR、CRRRにおいて、回転要素が360度行われていない、また投げと回転要素のタイミングが不正確であるため、連係がノーカウントとなる場合があった。
- ・連係が連続しているところで、選手の関わりが不足している場合があった。
- ・CRRで投げた手具の下をくぐる場合、正しくくぐっているか、タイミングがずれていないかを見極め、カウント、ノーカウントを判断した。

【団体E 1】

- ・演技の前半はテーマが見えても、後半はほぼ羅列のようになってしまう構成が多く見られたため、アイデアのガイドの減点に悩んだ。
- ・フォーメーション間の移行について、要素から次の要素へと移行する際、明らかに次のことを行うための移動だと見受けられるものが複数確認された場合には、減点を与えた。
- ・実施ミスが生じた場合に減点しすぎてしまうことがあり、作品全体に与えた影響を判断するということで審判長と再度確認を行った場面があった。

【団体E 3】

技術での評価は多岐にわたるが、どうしても、1つの落下ミスの減点が大きい為、実施力の差が得点の差となった。

ミスによる移動であるのか、そうでないのかは見解が分かれるところであるが、隊形や動きのつながり、選手の動きをみて、判断した。

審判間では一部において、見方が離れることもあった。

3. その他特記事項・意見・感想等

【個人D1 唐津 弥生】

・ステップについて、個性的なステップを踏んでいる選手は2名ほどしかいなかった。ほとんどの選手が1作品の中に入っているステップの数は1つ。2つ組み入れている選手は少なかった。2つ入れていてもADを行いながら足を動かしているだけなので、ステップとは見えないケース、ADを行うために足が止まっているため8秒に満たないケースが多かったように思う。

・能力の高い選手は、難度も正確で手具操作にも工夫があるため、面白く、見やすかった。そうでない選手は、難度も不正確なため、Eの減点を考えそのままカウントするか、あるいはダウングレードしてカウントするか、カウントしないか迷うことがあり、苦しかった。

・現ルールはできるだけ選手にとって有利になるように配慮する向きがあるため、不確実なものを思い切ってノーカウントにしてしまうのは、難しい選択であった。そのため、能力の高い選手、あるいは堅実に難度をこなす選手は採点しやすかった。

・クラブの操作でタッピングする選手が多かった。もう少し、様々な操作で難度を実施してほしかった。

最後に、この度は貴重な経験をさせていただき、多くの学びを得ることができ、大変感謝しております。ありがとうございました。

【個人D 3・団体D 1 栗原 悠】

インターハイに数年ぶりに審判員として参加させて頂き、個人団体ともに高校生全体のレベルが上がっていたことが一番の驚きでした。その為、1つのミスで大きく順位が変わってしまいますが、ミスあるなしに関わらず沢山の素晴らしい演技を見て国内の新体操界

にとってこの高校生の努力は大きな力になっていると感じました。次の大会に向けて更に頑張ってもらいたいと思います。今大会開催にあたり、地元鹿児島県の皆様には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

【個人ボールE 1 団体E 3 藤綱江津子】

今大会に際し、長きに渡りご準備頂きました高体連・開催地の皆様には、心より御礼申し上げます。

【個人クラブE 1 団体E 1 伊豆島知佳】

今大会に審判員として参加させていただきましたことに、心より感謝申し上げます。

個人・団体ともに、良い作品には良い評価をつけることができたかと思います。しかし、中盤順位の選手に対して差をつけていくこと、ミスが出た際、作品にどのくらい影響を及ぼしたのかを瞬時に判断していくことに難しさを感じました。身体が美しく作品性のある演技は増えてきましたが、D 得点獲得のため羅列になってしまう作品も多くありました。その中でも選手・指導者の努力や工夫により羅列を羅列にいせないという作品があったことに高校生のレベルの高さを実感致しました。

開催されました鹿児島県の役員の皆様、補助役員の皆様、高体連体操部の皆様には、深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

【個人ボールE 3 辻野麻由】

- ・全国大会であっても大きな減点となる転倒、手や手具での支持が選手の緊張からか起こっていた。
 - ・採点上打ち合わせた、手具の受けの際の移動なのか演技のつなぎとしての移動なのかについて見極めが大変難しいものが多くあり、そこから審判間の誤差がしょうじていることがあった為、時間さえ許せばそれだけに特化した研修があってもよいのではないかと感じた。
 - ・Eにおいては、落下ミス等を含め当日の実施力で大きく点差が変わってくる為、実施された演技を瞬時に判断できるスキルを身につけることができるよう、より研鑽を積んでいかなければならないと感じた。
- 3日間、本当にありがとうございました。

【個人クラブE 3 山本鈴代】

ADを熟すおとに世一杯のためか、基本的なクラブの扱いが出来ておらず、繋ぎや流れの切れる実施が多く見られた。また、全体的にスピード感がなく、スローに見えた。今後は、美しさを伴ったシャープな演技ができる選手が出てくることを期待したい。

最後に、関係いただいた全ての方々に感謝申し上げます。

【団体 D3 松田 桜】

多くのチームがリスクな連係を非常に多く組み込んでいましたが、追加基準（手以外、視野外）、投げの大きさ、投げと回転要素のタイミングを正確に実施することでD得点の評価に繋がると感じました。

少ない準備動作で、スムーズに連係に繋がっている作品が多く、高校生の連係のレベルは非常に高いと実感しました。

開催県である鹿児島県の先生方、大会運営に携われた方々、全ての方に感謝すると共に、審判員として貴重な経験をさせて頂きました。本当にありがとうございました。

【副審判長 寺田江身子】

開催県である鹿児島県の先生方、すべての役員の皆様、高体連体操部の皆様には準備から運営まで細やかなご配慮をいただきました。

この素晴らしい大会に審判員として参加できたこと深く御礼申し上げます。

【審判長 鈴木 あおい】

昨年よりDが青天井となり、個人団体同様にD3合戦となってきた現ルールにおいて、スムーズでかつ分かりやすい審判業務を遂行できるように業務にあたらせていただいたが、ルールに対応すべく果敢に挑戦する選手、チームが増えてきていることを感じた一方で、やはり作品に対する追求、音楽との調和、そして基本的に美しく踊ることや、大きく演技することなどに欠ける選手、チームが多く見られたことは否めない。演技の内容を増やすと踊れない、踊っていたらD得点が上がらない、そんな叫びを感じさせられた気がしている。それでも音楽の選択や作品のつながりの工夫をし、スピードがある中でも正しく美しく演じられる力をつけて行くことが重要である。そしてだからこそ、心が伝わる演技ができるように指導していくことの大切さを、一指導者としても感じさせられた試合であった。高校生最大目標であるこのインターハイの審判長として参加させていただくことに感謝の気持ちでいっぱいである。

また、台風の影響により、個人競技の全日程を2時間遅れでの進行になったが、鹿児島県役員の皆様、高体連体操専門部の皆様の迅速な対応により、大きな影響が出ずに、スムーズな進行がなされたことにも、感謝申し上げます。

最後に、開催地鹿児島県の皆様、高体連体操専門部の皆様をはじめ関係くださった全ての方々に支えていただき今大会が終了できましたこと、厚く御礼申し上げます。